

不思議な国の話

室生犀星

青空文庫

そのころ私は不思議なころもちで、毎朝ぼんやりその山を眺めていたのです。それは私の市街まちから五里ばかり隔った医王山いおうぜんという山です。春は、いつの間にか紫ぐんだ優しい色でつつまれ、斑まだら牛のように、残雪をとどころに染め、そしていつまでも静かに聳そびえているのです。その山の前に、戸室とむろというのが一つ聳そびえていましたが、それよりも一層いつそう紫いろをして、一層静かになつて見えました。

「あの山は何て山じゃ。あの山の奥は何処どこにあるのじゃ。」

そう私は私の姉にたずね、山という不思議な、まだ私たちの見たことのない国に、何かしら私たちに近いものが住んでいるよう

な気がしました。そう言っても天上の星族になお私たち人類が生息しているというような想像よりも、ずっと親しい問題だったのです。姉はそんなとき、

「あれはお前、薬草がたくさん生えている山なんですよ。それで医王山という名前がついているんです。」

「薬草って、どんなもの。」

「どんなものって、姉さんだつてすっかり知っているわけじゃないんですけれどね。あの山の頂いただきに、蒼い池があるそうだよ。いつものころからあるのか知らないけれど、それは古い、そして青い底をした水の冷たい池があるんですよ。そのまわりがに、さまざまなお薬になる草があるので、みんな昔は薬草狩かりにかけたものだ

そうですよ。大池っていうの。」

私はすぐ山の上にある、空ばかり映っていて、すこしも濁つてない青い水底を考えましたが、そこにも、やはり魚なんぞが河や潟かたのように住んでいるのか知らしと思つて訊ねました。

「魚はいるの。うしろの川にいるような魚が。」

「いえ、魚は水があまり冷たいんでいないんです、おられないんです、そのかわり赤いもりがおるんだつて。いやね、いもりなんて。」

私は即座に蛙のような奇体な、長ぼそいもりを考えましたが、まだ腹の朱いあかのを見たことがなかったので、そういう朱いのが実際にいるものか知らと思ひました。

「たくさんおるの。」

「なんでも、そのお池のなかに、大きな石があるんですて、その石がちようど傘のように、表面うわべは広がっていて、五六人も乗れるが、底の方はすぼがっていて、そこにたくさんのいもりがおるんだそうですよ。朱いのがその石のまわりを、誰もこないときにするで小さい人間の裸のようにちよろちよろ泳いでいるんだそうですよ。人間がちかづくと、ずっと底の方へかくれてしまつて、なかなか浮き上つてこないんだそうですよ。」

姉はそういうと持もちまえ前まえな上手な口調で、だんだん話しつづけるのです。どういふものか、私は私の姉の話をきいていると、話してくれることがすっかり目の前にはつきり浮んできて、まるで本ほん

統んとうの実景を見ているような気がするのです。それほど話上手な姉のことゆえ、手で真似をして見せたり、美しい眉をしかめたり、または、わざとその大きい黒い瞳をいっぱい開いたりするのです。「その石がね、池のまんなかにあると言ったでしょう、だからその石の上へ乗るときは柴しばの浮橋を渡ってゆくんですと——ほらお池のふちなどによく水草が生えているだろう、ああいう柴草がそこのお池の岸に、いっぱい水の上まで這はって繁はっていて、ひとりでに浮橋になっていているんだそうですよ。それが十年も二十年も経へっているのです、ほとんど人間がこさえたより最もつとがっしりしているんで、踏ふんだって蹴くつたって大丈夫なんですって。」

姉はそこで話をきると、躡しやがんで私をも前に座らせ青い名なし草

を抜きながら、それを手でむしっては話しつづけました。

「けれどもその浮橋の上に乗ると、池水がじくじくあしのうらし蹠に沁みてそりや冷たいんです。だからその浮橋の下は深い池だということ
がわかるでしょう。ところどころに穴が開いていて、そこから杖
をさし込むと、一間けんもある杖がらくに沈み込んでしまうんだそう
ですよ。」

私はそこまで黙ってきいていましたが、思わず口を挿しはさみ
ました。

「じゃその穴から落ち込んでしまえば、それきり沈んでしまうわ
けね。そんなに深いとすると。」

「そうだと、実際はどれだけあるか分からないんだけど、岸の

浅いところだつて泥沼のようになって落ちこむと、足掻あがきもできないそうだよ。ずいぶん怖いところでしよう。」

姉は、そう言つて医王山の方へ、ふいに顔を向けました。私もそのふしぎな山と、山の上にある青い池のことで、益々ますますいろいろなことを考えられてくるので、しずかに山をながめていました。山というものは、じつとしてゐるようで、そのじつ、眼を凝らしてながめていると、なんだか少しずつ動いてゐるような気がしてならないものです。わけても大きければ大きいだけ、なお、むずむずと目にわかるかわからないかの程度で、まるで息をしているような気がするものです。

二人がそうして眺めているうち、うす甘い春早はるばやに咲く杏あんずの花

の匂いが、庭の垣根の方からそよついで流れてきました。私は、春になると何より杏の花の匂いをかぐのが楽しみです。

「山にはどんな花が咲くの、杏なんぞあるの。」

「いえ。」

姉はちよいと考えるようにして、

「躑躅つづじなどはみんな紫なの、百合もそんな色をしているの、それから岩照いわてらしや、雪の下などという花があったり、ずいぶん珍らし花があるんです、町の方ですっかり桜が散ったところに、やつと山の麓ふもとの桜がほころびかかり、それが一日ずつ山の頂きへ向つて咲きのぼるんです。」

私は、そこにも人間が住んでいるのかと訊ねた。もしそういう

処ところに人間がどうして住めるものだろうかと考えたからです。姉は頭を振って、

「その山の下には住んでいるんだけど、山の中にはいないの。考えたってわかるでしょう。」

「わかるけれど……。」

「夏になると雑草が繁って登れないんだそうだよ春ならいいんだけど……。」

そのとき何処から流れてきたか、温かい白い雲がちぎれちぎれになって、山の頂へ、ふうわりと懸りました。まるで小さい帽子のように、ふしぎなまだ私の見たことのない国の上の秘密をつつむように、いく片となく浮きよせてきました。

私は毎日うしろの磧^{かわら}へ出ては、ぼんやりその山を眺めてはいました。姉の話してくれた山の上の、青い古い池の色まで、佇^{たたず}んでいる私の目にひとりでに浮んで見えてくるような気がしました。何^なんでも非常に静かで、雑林にとりまかれたような池の水の上に、まるで木の葉のそよぐような小^{さざなみ}波が立ち、それが池の沖へ向つてちよろちよろ目高^{めだか}のように走つてゆくさまや、そういう静かな日に限つて浮んでくるれいの、赤いもりが水底からすうと水面へ目がけて泳ぎあがつてくるさままで、いつも頭の中へ浮んできました。それが何ということもなく不思議で珍らしく実際にありそうもないことのように思われてしかたがなかったのです。

山の色は、うすい藍色のときもあり、鼠色だったり、あるいは一面に牛乳色ちちいろをした靄もやの中から紫の頭をあらわしたり、ほんの雲の間まにちよいと聳めまいえてみえたりしていました。それを見るごとに、私はちようど眩惑めまいのするようすうとした気もちで、その山の奥の方にある池のことを倦あきることなく考え込んでいたのでした。

姉は庭へ出るたびに、私の姿を見つけ、私のぼんやり佇たいでいるのをうしろから脅おそかしながら近づきました。

「あの池についておもしろい話があるんだよ、お前知っているの、知つつめていちゃ詰つまらないだろうから。」

姉はわざとそう私をじらして置いて、そばから離れようとしませんでした。

「知らないんだよ、話して下さい。」

「ほんとに知らない?。」

姉はいつものくせで、私の右肩に手を置き、れいの杏にの香においのする草場にある木の根に踏み込みました。ちょうど春の初まりかけたところで、芽生えのなかで茜色をしたのや紫ぐんだのや、そういう雑草の萌きざしがまるで花のようにつん出て、あるものはかなり高く伸びていました。私は再度姉にせがむと、姉は、れいの雑草の頭をぽつんぽつんと抜きながら話しつづけました。

「いつかお話したときに、ほら薬草狩りと言ったでしょう、あれはずっと昔のことで、お城下の薬舗きぐすりや店が毎年春の終りになると、みんな隊を組んで、あの医王山へ登るんですよ。つまりお山開き

のようなものなんだね。そんなときは、みんな揃って御馳走をこさえ、そして山神に供える鏡餅だとか供米くまいだとか珍らしい初実りの野菜とかを積んで出かけるんです。ちようど町を朝まだ暗いうちに発つて、長い五里の山道を駕に乗ってその麓まで行くんです。そこへ着くころは、もう夜が明けてしまつて、すぐ靄につつまれた山の麓の家々が、やつと起きたばかりなんです。」

姉は、その医王山の麓というのは、戸室山にはさまれた小さい村であることを言添えながら、

「そのお山開きについて面白い話があるんです。城下の古い木きぐす薬屋りやで、丁字屋ていじやというのがあるでしょう。あそこの家も毎年お山詣りに行んだそうです——ある年の春、例年のようにみんなで、

あの池のふちで、持つて行つた重箱を開いたり酒を飲んだりしているうちに、その一行にいた娘さんのお蝶が急に見えなくなつたのです。そのため皆は大騒ぎをして捜してみたけれど、更にわからぬ。谿たにあ合あいや雑林の奥なぞにもいない。とうとうその日も暮れたので、皆はその晩麓の村のお寺に泊つて、翌日も捜し廻つたのだが、何処にもそれらしい影すら見えなかつた。」

姉は更に話し続けました。

「父親はある晩、更けてからそつと娘の室へやうかがを窺つていたので、露がやや木の葉の上に光るようなころになると、娘の室の障子が、すうとひとりでに開かれました。ふしぎなこともあるものだ、よく気をつけてみると、紛うかたもない娘が半身を障子のそとへ

あらわし、庭を覗いてみましたが、きゆうに音もなく庭へ下り立
ったのです。しかも素足のままです。ああいうからだをして能く
歩かれたものだと思える位でした。どうするのかと見ていると、
こんどは擬宝珠ぎぼうしゆのかげへ躡んで、すうと、蒼白い、まるで麻の
ように晒された手を伸しました。はて、何をするのだろうかと見つ
めていると、その白い手が擬宝珠のかげへつつ込まれると、ふい
に、その陰草から一疋びきの赤蛙が飛び出しました。すると娘の手は、
その飛んだ跡へ跡へと趁おつて最後に押えつけました。そうすると、
こんどは、あたりを見廻すとその手をすういと自分の口元へもつ
て行きましたが、赤蛙はいつの間にか娘の口の中へ呑み込まれた
のです。そのとき娘はまるでこれまでに見たことのないような凄

い、^{すがめ}眇目のような微笑をもらして、うまそうにその赤蛙を呑み込んでしまったのです。それを見ていた父親はまるで身体中がしびれるような恐ろしい悪寒を感じました。娘がそういう恐ろしいことをしようなんて、一度も考えなかつただけに、その驚きようも^{いつそう}一層強かつたのでした。見ているうちに、ブルブル^{ふる}顫えるような身体を一そう鎮めてながめているうち、娘は幾疋となく赤蛙をつかまえると食べてしまったのです。そうして庭をあちこち歩きながら、草さえあると手で掻きさぐっていました。その歩いてい^るうちの陰気な音と言うたら、ゴムの上でも歩くような、音のないような変な遠い音なんです。そういう三十分程がすむと娘はまた音もなくすうと自分の居間へ^{はい}這入ってしまったのです。そのと

き何んだか障子ぎわへ姿が消えるとき、父親の目には細長いものの影がずるずる、湿っぽい暗い音をさせながら、すぐ、障子の中へきえてゆくのが、見えるともなく目にはいったそうです。そのとき身体中に森としたある不思議な寒さが、骨の髄まで徹つてくるような気がしたそうです。しかもその最後に見た障子の内のかげはまるで鼠の尾のような細い、鋭い影だったそうです。「

私はそのときあまりの不思議さに、よくそういう時に誰でもするように、姉の顔を唯凝視しつづけていました。うららかなかげが、杏の梢をすべり、わたしどもの跼んでいる足もとへも、すらすらこぼれており、そのためなお一層青い芽生えがその色を冴えさせておりました。

「その影はいつたい何んだらう、鼠の尾のようなものが……」

私はおもわずそう問いかけると、姉は、わらつて、

「あとでわかるから黙つて訊いてお出いで、それからその父親が毎晩のように、娘が庭へ出て蛙をたべるのを見たそうです。きまつて晩になると、こつそり室から脱け出すのだそうです。——けれども何しろ自分の娘のことであり、そういうことを世間の人に話するわけに行かないんで、黙つていました、相あいかわ滹からず娘の方ではそんな父親が監視していることなぞ知らないものですから一いっこ向うおかまいなしで毎晩庭へ出るのだそうです。

ある時、父親は不意に考えついて、娘の部屋の庭へ向っている障子ぎわに、金気のある錆びた棒を引いて置いたのです。父親は

心で考えたことがあるため、そう遣^やつてみて娘が何かに憑^つかれて
いるのか、それとも例の山中へ行つてから気が狂っているのか、
そういうことを確めるためにそうしたのです。

ところがその晩障子が開いたには開いたが、その金の棒のある
ために、きゆうに部屋の中へ這入つて行つてしまつて、再^またと出
てこないんだそうです。なぜというに、金気のあるものは憑きも
のに嫌われるからです。その翌晩もそうやって置いておきました
ので、娘はやはり室のなかで、ざらざら変な音を立てて歩いてい
るような様子だったが、出てくる様子とてもなかったのです。そ
の翌晩も、そのまた翌々晩もその金の棒を引いておいたのです。
——ところが反対に娘はこのごろになつて以前よりずっと瘠^やせ、

ずっと食べものを食べなくなったのです。ある日、父親がそばへ行くと、父親の顔をしみじみ眺めていましたが、不意に、あの鉄の棒をとって下さい、そうでないとわたしは息苦しくて仕方がありません、お願いですから鉄の棒を取りのぞいて下さいと父親にたのみました。父親も、娘の正体は何のであるか分らないけれども、可愛想な気がしてその晩鉄の棒を取りのぞいてやりました。

すると、娘はいつものように静かではなく、きゆうに障子をあけると、庭へ飛び出し、それきりその晩から姿を見せませんでした。丁字屋では大騒ぎをして捜したけれども、どこにも娘らしいものがいませんでした。父親は、あまりの不思議さに、ぼんやりと一日考え込んでいました。——娘のいた部屋へ行ってみても別

にかわりはありません。ただ娘のいたころよりも、れいの、青くさい匂いがなくなっていたのです。何気なくその布団を引いて見ますと、小さい蛇が黒々と一匹、皿巻きをしていました。父親は驚いてそれを趁ったが、その蛇はふいに床から庭さきへ^{すべ}ひり出し、それきり何処へ行ったか見えなくなつたそうです。

が、ふしぎにそれから後も、いつも土蔵の^{ひあたり}日南や、屋根の上や、娘のいた居間のそばなどに、どこから出てくるのか、れいの、黒々とした一匹の蛇が、まるで影のように皿巻きをしていたそうです。それゆえ、みんなは何日^{いっ}となくその蛇を趁わなくなり、却つてその蛇にしたしみを持つようになりました。小さい胸紐のよ^ううな蛇は、白い腹をし、わりあいにも、優しい目をしては丁字屋の

人々をながめてはいました。父親は、ときどきその蛇を掌のひらの上に乗せ、じつと日南の温かいところで、何となく、寂しくその円い輪まるになった蛇をながめておることなぞありました。もちろん、蛇は何んにもしません、蛇もこいしげに父親の掌上で、その可哀かわいらしい頭を持ち上げ、父親の顔をしげしげ眺め込んでいたりしていました。」

姉はそう言い終わると、私はきゆうに訊ねて見ました。

「では娘さんはどうしたのだろう、どこへ行ったのだろう。」

「それはね。」

姉は言葉を切ってから、

「ほらあのお山へ行ったときから、きつと蛇につかれていたんで

すよ。それゆえ、ずっとさきに死んでいたのかも知れない——だから今でもあのお山には、そのお蝶さんのお墓が建っているそうだよ、その池のまわりにね。」

私は、きゆうに、医王山の方をながめました。今日はくつきりした紫色に晴れ上っていました。姉も同じいように、山の方をながめました。私は不思議な話が頭のなかに生きているため、その医王山が一つの生きものようになって見えました。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 室生犀星集 童子」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年9月10日第1刷発行

底本の親本：「室生犀星童話全集 第3」創林社

1978（昭和53）年

初出：「金の鳥」

1922（大正11）年4月号

入力：門田裕志

校正：岡村和彦

2013年8月11日作成

2013年10月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

不思議な国の話

室生犀星

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>